

## 第 20 話〈鉾山町〉の要約と参考資料

### 第 20 話〈鉾山町〉の要約

山口保明さんは、古老の話をもとに銀山時代の略図を描きました。女郎屋敷、町、寺屋敷、三弥屋敷の跡などが記載されています。夫人の加津子さんはエッセイに「外録銀山・登尾銀山・見立錫山・吹山鉛山等々からもかね吹きの烟の絶える間なかった」と書きました。

### 第 20 話〈鉾山町〉の参考資料

#### 20-1 山口加津子の外録銀山探訪

山口加津子「西鶴文学の題材を追う（一）」（花礁創刊号；2001年4月）

私が三弥の夢買い長者の話に興味を覚えたのは、昭和40年代の初めの頃であった。

夫が学生諸君と連れ立って見立鉾山（西臼杵郡日之影町）の民俗調査へでかけた。その折私も調査録の整理に加わり、持ち帰ってきた採訪録のテープを聞いた。懸命にそして少し緊張した古老たちの声が、どこか懐かしく侘しく琴線にふれてくるのだった。

作業はまず村人の歌う声の歌詞を確かめ、柳田国男の『民謡覚書』を参照しながら分類を試みる。レコーダー2台を操作しながら、「金吹き唄」「伊勢音頭」「ヨイヤナ」などと……。曲節も捨てがたいので採譜を弟菊村清隆に依頼し、夫はそれを『見立古謡資料集一』と題してガリ刷りで製本した。（P25）

ところで、そのかな山を訪ねて、私がはじめて土呂久への道を辿ったのは昭和46年の5月のこと。長女7歳の誕生日に高千穂町の中心地三田井から天岩戸神社のある岩戸までバス。うれしいのは吾子ばかりでない。緑に染まったバスを下車して、6キロ程の土呂久への林道を会話しながらのぼった。

長女はオレンジ色のブラウス、手作りのリュックにおやつを詰めて背負った。長男は2歳で夫の肩車がお気に入りであった。私は四人分の弁当持参。三弥屋敷と伝えるその跡まで、幼い足で訪ねる吾子の一步一步が山石に足をとられて危うい。目に入る渡る風さえも冴えざえとして、道沿いの岩ばしる水のきらめきは、まるで光の噴水のようなだった。

この僻遠の地に家のつくりまで贅沢をつくり、庭園まで工のわざを凝らしたという鉾山師三弥の屋敷跡をはやく見てみたい。そこは、緑に覆い尽された山と眩むような深い谷とのはざまに、ちょっとした台地があり、夏蕎麦の花が一面に咲き乱れていた。ただ、緑の五月の風が吹くばかり、そこが一代出世の鉾山師三弥の屋敷跡だった。ちなみに、土呂久南にはもう一つの山弥屋敷を伝え、その庭園の結構が、往時の姿をしのばせる。

（P25-26）

三弥の仕事屋敷があったという祖母山麓の山深いこの一帯には、土呂久銀山・登尾銀山・見立錫山・吹山鉛山等々が開鉾されており、かね吹きの烟の絶える間はなかったと

伝えている。(P27)

山口加津子「西鶴文学の題材を追う(二)」(花礁第2号;2002年4月)

土呂久における三弥の足跡をたどると、三弥じきとか一番鉦とか鉦口の跡をはじめ、現在の土呂久集落の中心地で、通称寺町通り隣の「三弥屋敷跡」、同じく土呂久南の「三弥屋敷跡」などである。また岩戸五ヶ村の宝池山泉福寺には三弥の供養塔があり、それには「南無阿弥陀佛 文政五壬午三月供養 豊後国府内森日山弥塔」の刻銘がある。左側には、開基僧釈浄尊の同型の追善碑が並び、これは同寺八世の釈大乘が三弥塔と共に文政5年(1822)に建てたものである。

西鶴が浮世草子のモデルとした万屋三弥は、正称守田山弥之助氏定、供養碑に「森日」とある。刻字のとき、守を森とし、日を刻み一面落としているのは罪を得た人という意識から出たものであろう。つまり、これらの事蹟や「かねふき歌」などから土呂久銀山と三弥の伝承は、単なる民話の類ではなく歴史上の事実であった。(P44)

平成8年、『日之影町史』を編さんする為の民俗調査に私も同道した。鉦山の人々で賑わっていたであろう酒屋敷跡も女郎屋敷跡も、今は跡さえなくただ墓地を伝えるのみで、鉦口はあるものの自然の山に還っていた。

見立(大吹鉦山)と土呂久鉦山とは指呼の間にあり、共通した鉦山の働き歌を伝えていた。編さん室の方々にも協力を願い、三弥に関わる歌を捜して頂き、伝承者を求めたのだったが、もう聞くことはできなかった。浅野健二先生に喜んでいただいた歌は、もう地元の歌としては存在していない。録音したテープも劣化が甚だしく、ちなみに、最後の伝承者はかつて山々の民俗を探訪した夫のみとなった。

はじめて土呂久に足を踏み入れてから、この新世紀は31年目の節目になる。三弥時代から三百有余年の時を経て、近代の悲劇砒素公害は起こった。一昨年(平成12年12月)バングラデッシュの医師団が土呂久に来訪。いま、同じアジアの地で、砒素公害に苦しんでいる人々がある。テレビでは土呂久の砒素公害で亡くなった方々や、苦しんでいる人達の話聞き、泣き崩れる医師の姿が放映された。長女はアジア砒素ネットワークの末端で、微かに土呂久に関わりを持ち続けている。長男は帰省した折、パソコンでセピア色に変色した土呂久の写真を修正、120枚程をMOに収めてくれた。(P45)

20-2 山口保明の録音テープ(1969年夏)より

土呂久惣見の佐藤カジさん(明治30年2月生)からの聞き取り

山口 上の方に女郎屋敷があった?

カジ 女郎屋敷は川の向かいにあったですわ。合宿があるですわ。あそこが昔の女郎屋敷。「有馬屋」というてね。女郎さんはたくさんおったでしょうね。

山口 女郎さんたちの墓は?

カジ 聞いたことがない。ここへんは土呂久の「町」というて、家ばかりじゃったき。ずっと前のことです。年寄りが話していたのをどこそこ聞いただけです。

山口 上に「杉待ち（松）谷」があるですかね。

カジ あるです。杉待谷というて。

山口 そこに女郎が石に書いたのが残っているということは。

カジ 知らんですわ。佐藤ふみおさんに聞いてみたら。あそこの地所になつとるですきね。

山口 お杉という女郎がおって、そこで待っていたから杉待谷になったとか。

カジ 聞いておらんですわ。

山口 アンチン山はどこにありますか。

カジ （営林署の土呂久）事業所の上ですわ。あそこから少しあがると行きます。

土呂久畑中の佐藤義雄さん（明治 32 年生）からの聞き取り

山口 女郎屋もあったという話ですが。

義雄 儲け始めてできたんでしょうね。

山口 酒屋もあったわけですね。

義雄 酒屋はなかったでしょうが、酒を売るところはあったでしょうね。